

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520126

研究課題名（和文） 美術解剖学の教育としての今日的意義—日本とドイツの比較・交流を通して—

研究課題名（英文） The Contemporary significance of the education of artistic anatomy  
—Through the comparison and the intercommunication between Japan and Germany

研究代表者 宮永 美知代

(MIYANAGA MICHIO)

東京芸術大学・美術学部・助教

研究者番号：70200194

研究成果の概要（和文）：ドイツの美術解剖学者、解剖学者との意見交換を通して、美術解剖学や肉眼解剖学の「等身大の人体を見る」教育の重要性を確認し、教育としてのこの分野の発展のための礎が築かれた。歴史的にドイツの標本展示と活用は立体的かつユニークなもので、かたちの学びにおいて、発生学と比較解剖学の視点が強く打ち出されているところに特徴がある。「生と死の学び」としての美術解剖学研究では、美術系学生の解剖見学が人体構造の重層的理解に加えて深い死生観の獲得に有意義であることが分析から明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Through the intercommunication with German anatomists, both artistic and medical, we confirm the educational importance of “seeing the human body with the size of its own” that artistic anatomy and gross anatomy suggest. And we have constructed the foundation for the development of this field as the education. Historically, German exhibition and utilization of the specimens are stereoscopic and unique, and in the case of studying figures these are strongly characterized by using the viewpoints of embryology and comparative anatomy. In the study of artistic anatomy as “A study of the life and the death”, the visitation to dissection of art related students is clarified by analyzing our research to be significant for acquiring the deep life-and-death thought in addition to the multileveled understanding of human structures.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：美術解剖学、教育、人体、書誌、生と死、肉眼解剖学、標本

## 1. 研究開始当初の背景

ルネサンスから19世紀末まで、美術解剖学は造形教育のための先進的な学であり続け

た。その後、20世紀の抽象表現や現代美術の潮流の中で、「写実の用のためのものに過ぎず、画家や彫刻家の手足を縛る」と批判的に

とらえられるようにもなり、美術における最重要科目からはずされてゆくこととなった。

しかし、「ひとのかたち」の構造的な学びが今日不要になったかと言えばそのようなことはなく、むしろ反対に人体のかたちと構造の学びを必要とする表現や分野は、アニメーション、マンガ、映像、ダンス、パフォーマンスなど、むしろ美術とその周辺にまで広がりを見せている。

日本の美術解剖学教育は、東京美術学校で森鷗外、久米桂一郎らが教鞭を執り、その後も西田正秋、中尾喜保、高橋彬らによって引き継がれてきた。とりわけ美術解剖学が過去の学びに過ぎないという一面的な批判が多くあった時代の教師であった西田、中尾らは、美術解剖学が「造形のための用の解剖学」であることからより踏み込み、人体を核とした「かたちの学」であるとし、工夫を凝らした講義を行い、学生達に広く支持され続けた歴史がある。

一方、ヨーロッパでは19世紀までの美術解剖学が最重要科目の一つであった時代から、20世紀にはアメリカ現代美術の影響を強く受け、とりわけ旧西欧諸国で、この学びは壊滅的なダメージを受けた。その一方、旧東欧諸国ではこの学びは脈々と生き続け、グラフィックやソリッドなアートのために、必要なベーシックな教育課目として教授され続けている。とりわけ現代ドイツでは伝統的な美術解剖学の継承とともに、近年、新しい時代の美術解剖学教育を模索する流れも生まれている。

現代のめざましい科学技術の発達による人体の研究は、組織から細胞、さらには遺伝子を構成する分子レベルへとより微細、かつ機能、基質的なものへと細分化された。美術もまた社会とともにあり、これらの先端的科学の成果を反映した表現もみられる。しかし、細分化により、本来等身大で生活する私たち自身の等身大の視座がおろそかにされ、身体観が不自然に歪んで形成されるリスクも免れ得なくなってきたようにも見える。

また日常生活では「生」が極端に肥大化した。このため「死」にまつわる事象は極端に忌避され、現代人は死と対峙できずにある。生死観の形成においてもまた歪みが生じていると言わざるを得ない。身体を細分化して捉える見方に偏ることは、必然、生命の営みを皮相的に捉えることに繋がっているように見える。本来「生」と「死」は表裏の関係で支えあい、どちらも重いのである。

美術解剖学は解剖という現場で「死」と接し、「死」を学び、ご遺体から教えていただく、あるいは学ばせていただくという謙虚な気持ちで臨むことを教え、ひいては生きることの意味を考えさせる。「生と死の教育」としての美術解剖学という側面も新たな意味

を帯びて存在すると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、芸術表現が多様化した今日においてこそ、逆に必要とされる人体の学びを、日本とドイツの美術解剖学教育とその内容を比較検討することにより、美術解剖学の今日における新たな教育的意義を明らかにするものである。

## 3. 研究の方法

美術解剖学の歴史の調査と、日本とドイツの教育の現状を調査、検討し、相互の交流のなかから新たな美術解剖学の可能性を明確にしてゆこうとするものである。

(1) 日本の教育としての美術解剖学教授内容の変遷のまとめとして、美術解剖学教育に関する書誌的な調査を行った。

### (2) ドイツの美術解剖学者との意見交換

ドイツでの美術解剖学教育、歴史と教育方法の調査を行った。また、ドイツの美術解剖学者の来日による日本とドイツの美術解剖学講義内容の確認や、美術解剖学会大会での日本の美術解剖学者との交流を行い、意見交換を行った。日本とドイツの美術解剖学教育の内容の比較検討を、教授内容の比較、教材の比較などを行った。

### (3) 生と死の学びとしての美術解剖学研究

解剖実習は医歯学系学生を対象に行われるが、美術解剖学を学ぶ美術系学生にとっても解剖見学は大きな意味がある。かねてより収集したレポートをもとに、解剖見学の意味について考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 日本での書誌的調査

日本で美術解剖学を創始した森鷗外が講義のために表したテキスト『藝用解剖学』とドイツの美術解剖学書(コルマン)との内容の検討を行った。

### (2) ドイツの美術解剖学者との意見交換

① ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学のマンフリート・ツォラー教授を日本に招聘し講義や研究会、美術解剖学会での講演を通して、ドイツでの美術解剖学教育の現状を知った。旧西欧圏では、美術解剖学はほとんど美術学校で教授されなくなった。一方、旧東欧圏の美術大学では、比較解剖学の学びと、立体造形制作を組み入れ、システムティックな教育を行っていた。氏を招いての美術解剖学会の交流を通して、教育としてのこの分野の発展のための礎が築かれた。ツォラー教授は帰国後、ドイツで『解剖と美術研究会』を設立し、

今後日本との交流を深めてゆくこととなった。

② ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学での美術解剖学講義について、ソラー教授と意見交換し、標本類の調査を行った。ライブツイヒ・クラフィック大学でのユニークな美術解剖学を行っていたガルシュケ教授が2010年急逝したが、大学に残された美術解剖学標本と遺族所蔵の標本と遺稿から、二人の美術解剖学では比較解剖学の学びが大きな意味をもっていることを確認した。

③ ライプツイヒ大学解剖研究所の招待を受け、セミナーで日本の美術解剖学研究の一部を紹介する講演を行い、解剖学者らと交流した。この研究所でも細胞と分子生物学に重心があり、肉眼解剖学部門が縮小されていた。しかし、等身大で人体を見る視座は医学においても重要であることを研究所長との対話のなかで確認し、複雑な解剖学的構造を学生達がいかに理解しやすく伝えるかを、現代的な技術を駆使した標本等の工夫を見ることができた。

(3) 生と死の学びとしての美術解剖学研究

① 世界初の献体を自ら実践したベンサム『解剖法』と彼の遺体であるAuto-Iconに関する研究がまとめられた。

② 美術系学生の解剖見学の意義

医学系の解剖実習の意義については、献体者への感謝(86%)、人体構造・組織についての学びの効果(82%)、実習への学びの展望(68%)、生と死についての理解や意識の深まり(44%)解剖実習関係者への感謝(42%)があり、使命感を帯びた意欲が示された。

一方、美術系学生にとっての解剖見学の意義について同項目で見ると、献体者への感謝(24%)、人体構造・組織についての学びの効果(80%)、実習への学びの展望(24%)、生と死についての理解や意識の深まり(40%)解剖実習関係者への感謝(52%)であった。ただ一回の機会であったが、得難い機会であると考え、生と死の学びとして解剖学を学ぶ機会が医歯学系学生と同様にみられ、生死観への影響が伺えた。美術解剖学が構造の学びであるとともに、今後この機会を決して忘れずに無駄にしないという決意が述べられるものが多く、解剖見学の機会が見学について十分な説明の後に与えられることの有効性が伺えた。この内容を、美術解剖学雑誌を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 宮永美知代、教育としての美術解剖学、美術解剖学雑誌、査読無し、15(1)、(2011)、2-10

② 島田和幸・青柳路子・小松佳代子・宮永美知代、森林太郎の書中に紹介されたドイツの美術解剖学書、美術解剖学雑誌、査読有り、14(1)、(2010)、67-75

③ 小松佳代子：ジェレミー・ベンサムのAuto-Iconをめぐる覚書、美術解剖学雑誌、査読有り、14(1)、(2010)、35-44

④ 島田和幸、Paul Richerの業績と美術解剖学、美術解剖学雑誌、査読有り、13(1)、(2009)、47-56

[学会発表] (計8件)

① 宮永美知代、顔の美術解剖学、第16回人類形態科学研究会学術集会(日本解剖学会分科会)、(20120326)、山梨大学甲府キャンパスK-1F(招待講演)

② 宮永美知代、顔の美術解剖学、第5回見た目のアンチエイジング研究会(日本加齢医学会分科会)、(20110807)、AP梅田(招待講演)

③ 宮永美知代・青柳路子・小松佳代子・島田和幸、日本とドイツの美術解剖学の近似と相違、第18回美術解剖学会大会、(20110716)、東京藝術大学美術学部第1講義室(口頭発表)

④ MIYANAGA MICHIOYO, The beauty of the skull, Institute fuer Anatomie -Universitaete Leipzig Seminarreihe: Cell-und Molekularbiologie von Organsystemen -WS 10/11、(2010.12.23)、Studiensaal(Raum19a) Institute fuer Anatomie -Univ. Leipzig(招待講演)

⑤ 宮永美知代、美術解剖学が教育に果たしうる役割、第16回美術教育研究会大会、(2010.11.17)、東京藝術大学美術学部第3講義室(口頭発表)

⑥ 島田和幸、体表解剖学とは、第17回美術解剖学会大会、(2010.07.17)、東京藝術大学美術学部第1講義室(口頭発表)

⑦ 宮永美知代、教育としての美術解剖学、第17回美術解剖学会大会、(2010.07.17)、東京藝術大学美術学部第1講義室(招待講演)

⑧ 島田和幸、Harlessの美術解剖学書について、第16回美術解剖学会、(2009.07.18)、東京藝術大学美術学部第1講義室(口頭発表)

[図書] (計2件)

① 東京藝術大学美術教育研究室編、美術と教育のあいだ、東京藝術大学出版会、(2011)、宮永美知代「人のかたちの学びから美術制作へ」255-268

② 宮永美知代、美女の骨格、青春出版社、(2009)、1-189

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮永 美知代 (MIYANAGA MICHIO)

東京芸術大学・美術学部・助教

研究者番号：70200194

(2) 研究分担者

小松 佳代子 (KOMATSU KAYOKO)

東京芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：50292800

青柳 路子 (AOYAGI MICHIKO)

東京芸術大学・美術学部・講師

研究者番号：50292800

島田 和幸 (SHIMADA KAZUYUKI)

鹿児島大学・医歯薬学総合研究科・教授

研究者番号：80130525

(3) 連携研究者

本郷 寛 (HONGOU HIROSHI)

東京芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：00190265